

青輝 ひづき

「グルアアアアツツ！」

「グアーじゃないっての」

血飛沫が舞う。真つ黒な血が、同じく真つ黒な獣の真つ二つにされた身体から、さながら花火のように。

自身の優に倍以上の体格を誇る獣をあつさりとは断した少女は、刀身を淡く光らせる細身の剣を鞘に収めつつ後ろを振り返る。彼女の背後には、まさに死屍累々といったように先程の獣と同じ姿形をした生き物たちの無残な亡骸が大量に転がっていたが、彼女が見ようとしたのはそんなものではない。

「さて、愛しのハニーの方は？」

目を細め、額に手を翳しながら目を凝らす。

「うん、楽勝って程でもなさそうだにやー」

彼女の見つめる先、彼女のものと同じ白を基調とした制服を纏った青年が、やはり真つ黒な獣たちと戦っていた。しかし彼女のように一回の行動で一匹ずつ狩れるような手際の良さはなく、複数の敵を相手に慎重に間合い取りをしていた。危なげがあるわけでもなかったが、なかなか時間にかけりそうな戦い方ではある。

「ちよびつとだけ風が吹けば勢いづく炎かなー」

背後を取らせないような位置取りを心掛けつつ、青年は慎重に剣を振るっていた。大振りな攻撃は極力控え、隙の小さな打ち込みを的確に重ねていく。

(…だが、手負いの獣ほど危うくなる)

自分の戦い方を批判的に捉えながらも、かといって自己の能力の限度もしつかりと弁えているため大きく攻勢に出ることもしない。苛立ちだけが緩やかに層を重ねていくような、そんな出口の見えない行為の連続。

とそこで、青年の右側にいた獣が唐突に血煙に包まれた。残りの獣たちに生じたわずかな焦燥を見逃さず、彼は一気に攻勢に出る。ある程度統制の保たれた獣たちの動きは途端に乱れ、その流れを立て直すことも叶わぬまま、しばらく後にはいずれの獣も地に伏す結果となっていた。

血糊の付いた幅広の剣を二、三振りつつ鞘に納めようとした青年の背後から声がかかる。

「ハニー、お疲れ様♪」

そんな軽い口調に取り合うことなく歩き出す青年。肩口に届こうかというやや長めの髪を、ほとんど揺らすことなく歩くその姿には、毅然さと共に一種の影が見え隠れする。ぽつんと置いてけぼりをくらう少女。

「え、ちよ、ちよつと！」

慌てて小走りに追いかける。少し前まで笑顔に彩られていた顔は、今やこれでもかというくらい不満を押し出している。

「なんでそんなに素っ気ないのさ？」

かけられる声に応える声はない。

「……やっぱ余計なお世話だった、かな？」

「……別に、君の行動に不満があるわけじゃない」

ようやく青年から答えが返る。しかしその歩調は緩まない。

「じゃあ、どうして……」

「……同僚から手を借りなければあの程度の魔物も満足に処理できない無力。君が自分の立場なら、素直にその境遇に甘んじられるのか？」

その言葉に、すぐには二の句が継げなくなる少女。駆け足気味だったその歩調も遅くなる。

「……ふう、ホント生真面目なんだから……」

その微かな呟きが青年にも届いたかどうか。徐々に離れていく、所々に黒いラインが細く描かれた制服の背中をぼんやり眺めながら、少女は考えを巡らせる。

「……もつと他のことにもその生真面目さを活かしてくれればなー。……具体的にはベッドの中で、とか。……キヤッ、あたしっつたら♪ ……プへへえ」

不満顔がいつの間にかだらしない顔に変わり、にへらにへらと笑いを漏らす。足は完全に止まり、頭の中は

遙かな妄想の世界へ。

「……ハッ！ ちよ、ちよっと待ってってばー！」

彼女の意識が再び現実に戻ってきたのは、歩く青年の姿が手の平に載るくらい小さくなった頃だった。

「あと半日もあれば聖都に着くってさ」

馬車の御者と軽いやり取りをして馬車内に戻ってきた少女がそう声をかけた。

彼女の名前はリゼ・プラディッシュ。黒に近いながらもわずかに青の色彩も帯びた濃紺の髪は、うなじが隠れるかどうかというくらいの短さで、左側で髪を一束分だけ丹念に編み込んでいる髪飾りがワンポイントになっている。瞳の色は茶色。背丈は同世代の女性のそれとほぼ変わりなく、スタイルも似たようなもの。しかし着込んでいる制服は本人の体格と比べてやや大きめのサイズらしく、首より下の肌の露出はほとんど見られない。

「……そうか。戻るのはいっつ以来になる？」

応える青年の名はサハリ・ドーナヴィー。女性であり、リゼよりも少しばかり長い黒髪と、黒い瞳を持つ。そして彼、および彼女の着ている制服は、この世界の秩序を司る教皇庁が保有する多数の実執部隊の一つ、『箒星』の物である。

今のサハリに先の戦闘後のような他を寄せ付けない雰

困気はなく、リゼの方も気安い。もともと二人の間柄は
ぎすぎすしたものではなく、むしろかなり良好なものだ
とわかっていい。

「うーん、確かパリオリの花が開花した頃だったから：
…うわっ、もう3ヶ月以上も前だ！」

「随分と長い間、支柱建設に付いてたんだな」

「そだねー。あれは支柱の中でも特別大きな方らしかつ
たから」

二人の会話に出てきた支柱というのは、言葉通り支え
るために建てられる円柱状の建造物を指す。しかし支え
るのは建物や土地といった『物』ではなく、この『世界』
そのもの。小さなものでも家一つ分の幅は持っており、
彼らが護衛として付いていた支柱は小さな集落が丸々入
りそうなほど巨大で、また天高く聳えるようなものだっ
た。

この世界は一年ほど前に崩壊寸前の危機を迎えた。

実は歴史上、数百年に一度程度の割合で、この世界は
崩壊と隣り合わせの状態へと陥っていた。一説には常に
人類の文化水準を一定以上に進化させないための天から
の戒めだとなり、また他説では人間をより高位の存在へ
と導くための、神から与えられた試練だとする考えもあ
る。どのみち、教皇庁の力を以ってしても未だ明確な理
由は掴めていない。ただ確かなことは、教皇庁に所属す
る、神官を始めとした神に仕える者全てに、全く同じ啓

示が降りるということ、そしてその啓示を無視した事例
が、今まで一つたりとも存在していないということだけ
である。

教皇庁の働きで昨年の天地崩壊の急難をなんとか退け
たこの世界にはしかし、『世界』そのものが持つ歪み修正
の速度では追い付かないほどの甚大な被害がもたらされ
た。そのため、一時的にでも世界各地を『固定』し、順
次『世界』からの修正を待つ、という仕組みが教皇庁よ
り提唱された。その役割を担う重要なフアクターが教皇
庁によって建設される巨大な円柱、すなわち支柱なので
ある。支柱は、その規模に応じた干渉範囲でもって周辺
の地域の固定を行う。

しかし『世界』を固定させるということは、それ以上
周囲の状況を悪化させない働きを持つのと同時に、『世
界』が及ぼす回復の進行も一時的に遮断することになる。
つまり回復箇所を絞ることににより、人類の生活に大きく
関わる地域から優先的に修正していこうということなのだ
である。

しかし世界からの修正が行われていない土地で、酷い
所になると風は凝り、土地が痩せ、水も濁っているとい
う場所もかなりある。そんな、人が生活していくにはあ
まりにも過酷な状態のまま、「そのまま他が良くなるま
でしばらく耐えていてくれ」と言われて納得できる住民
など決して多くはない。

さらに支柱は、一度建設されてしまうと、教皇庁の一部にのみ伝えられる特殊な崩壊コードを用いない限り容易には撤去できない。それ故、事態が収まった後の教皇庁権力の極端な肥大化を危惧する思想も多い。

そういった理由から支柱建設には、世界各地に数年前から現れ始めた魔物と、皮肉なことに、支柱により救われるべき人間たち自身から、建設途中の支柱を守る護衛が必要となるのである。

サハリとリゼの所属する『箒星』は、乱暴に言っしまえば教皇庁内の便利屋的なポジションを強いられ、おり、支柱護衛も最近では主要な任務の一つとなっている。「オルナと会うのも久しぶりだよねー」

「……口を慎め、と言ったところで今更無駄だろうな。せめて他の隊の人間の前ではそう呼ばないよう注意してくれ。例えば本人が嫌がってなくても、だ」

「プへへ、わかってる、わかってますって」

「……やれやれ」

そう溜め息をついてサハリは馬車の外へと目を向ける。もうまもなくで教皇庁を中心とした、現在この世界で最も栄えた都の一つ、聖都を象徴する最高の支柱が見えてくるはずである。

「しっつれいしま〜す！」

「……失礼します」

ノックの音と共に、調子のまるで違う二つの声が部屋に響く。

「どうぞ」

応答の言葉が発せられるかどうかというところで、すでにドアは開きかけていた。そこから元気良く（そして遠慮することなく）入ってくる少女と、その後ろで額を押さえている青年。

その部屋は持ち主の性格もあり、機能性のみ重点が置かれた構造になっていた。豪華な飾りもなければ内装も質素の一言に尽き、名目通りに執務のみを執り行うため用意されたような部屋だった。現在の教皇庁で教皇の序列『第三位』に次ぐ地位『第四位』のうちの一人が入ってきたそのままのテンションで軽く挨拶しようとする少女を辛うじて制し、何とか形だけでも真面目に取り繕って青年が挨拶をする。

「教皇庁変則設実執部隊『箒星』所属、サハリ・ドーノヴィー、リゼ・プラディツシュ、以上二名。エボラシの街における支柱建設護衛の任を完了した旨、ここにご報告申しあげます」

「はい、確かに。ご苦勞様でした」

大きな執務机に似合わぬ小さな身体が、これまた小さく会釈をする。

その女性はオルナ・クヴァル・レッドスピリッツの名を持ち、その多大な権限のひとつとしてサハリたちの所属する『箒星』の任免権も与えられている、教皇庁『第四位』の人間である。しかし当人は小さな容姿とそれに相応する童顔、室内でも被っている大きな帽子、そこからわずかに覗く銀色の髪と、琥珀色の大きく丸い目といった特徴により、誰が見ても「凛々しい」より「愛らしい」と称されてしまうような外見をしていた。

その傍らにはサハリと同年代くらいの、長身痩軀で眼鏡をかけた金髪の青年が佇んでいる。部屋の主の容姿との比較もあり、ある意味誰よりもこの執務室という部屋に相応しい容貌をしていた。

「では次の任務が確定次第兵舎の方へご連絡願います。我々も長旅からの帰路ということで、少々疲弊しております故、詳しいご報告等は後日書面にて——」

「ちよおおとつと待ったああああ！」

さつさと会話を結んで何も問題が起きないうちに退室しようと考えていたサハリの思惑は、その一声であっさり崩された。

「なああんでもう兵舎に戻る雰囲気になってるの！ 今来たばかりでしょうが！」

「だが報告は書面でも十分——」

「そんなの当たり前じゃない。だからここでは任務以外のおしやべりをするべきなの！」

「おしやべり……。お忙しいクヴァル様に対していくらなんでもそれは無遠慮すぎる……」

「大丈夫だよね、オルナ?!」

そこでいきなり話を振られたオルナは、リゼの有無を言わせぬ剣幕にやや圧倒されながら、それでも常の無表情を変えないままに答える。

「ええ。特に急務が入っているわけでもありません」

「ほら、大丈夫だって！ 他に言いたいことはある、サハリ？」

会話をする当人たちがいいと言っているのに、会話に参加するつもりのない人間がどうこう言えるわけもない。サハリは諦めと共に首を力なく左右に振った。

それを了承と取ったリゼは早速机に座る女性と話を始めようとする。

「……ああ、ですがその前にひとつだけ事務的な報告を。支柱護衛の任務は問題なく行えましたか？」

「もつちろん！ 完成間近に魔物の群れと当たっちゃったけど、ハニーとのラブラブパワーで一網打尽に——」

「自分はやはりブラディッシュの足手まといに過ぎませんでした。徒伴組の再考を進言します」

そのサハリの言葉だけは、リゼの言葉に遮られることなく部屋に響いた。勢い良く喋っていたリゼも一瞬言葉を失う。

「力不足……。そうですか」

そうぼつりとオルナが洩らした。その様子を見咎めたリゼの眉がぴくんと反応する。

「あれ、なんかオルナ安心してない？」

何気ないリゼの一言に、一瞬大きくオルナの目が見開く。しかし数瞬後には何でもなかったかのようにいつもの様子に戻った。少なくとも表面上は。

「……何を言っているのですか、リゼ・プラディッシュ……。……わかりました、先の件考えておくことにしましょう、サハリ・ハーノヴィー。しかし組織構造上すぐさま変更するというわけにも参りませんので、どういった結論が出るとしても、しばらくは現状維持という形で構いませんか？」

やや無然としながらも、サハリは小さく首を縦に動かした。

「……ではリゼ・プラディッシュ。私にどんな話を聞かせてくれるのでしょうか？」

オルナからかけられた言葉で、どこか腑に落ちないような表情を見せていたリゼの顔に、また笑顔が戻ってきた。

「そだねー、まずはエボラシの街に、最初に到着したときのことなんだけどお……プへへ、あ、思い出したらまた♪」

リゼの楽しそうな声とオルナの平淡な、だがどこか興味のあるような相槌を聴きつつ、自分一人だけでも退室

してはどうか問うのを、長い間逡巡していたサハリであった。

コンコンと、小さく規則的なノックの音が響いた。「あ、どうぞ」

部屋の中からのんびりとした声が聞こえてくる。その返事を最後まで聞き届けてから、サハリは部屋のドアを開いた。その部屋は教皇庁内で『箒星』に割り振られた内の一部屋で、主にリゼが使っている。とは言っても、『箒星』は教皇庁から離れての任務がほとんどであり、主がいる時間よりも空室の時間の方が遥かに長いのだが、殺風景であるう内装を思い浮かべつつ、サハリは部屋の中に足を踏み入れた。

想像通りの殺風景の部屋の中心では、全身を白い衣装に包んだリゼが背中を向けていた。白い衣装、しろいしよう、シロイ……

「！ す、すまない！ 着替え中だったとは！」

リゼの容姿を認めたサハリは慌てて振り返り、すぐに部屋を出ようとする。

「待って。サハリはちゃんとノックして入ってきたでしよう？ なら悪いことしてるわけじゃないよね」

その声は、意外なほど冷静で淡々とした口調だった。とても一糸纏わぬ姿を他人に見られた者から発せられる

声ではなかった。

「一気にドアを開けようとしたサハリには、それがかえって大声を出されるよりも確かな制止の力となった。視線がドアに向かって固定される。」

「ノックしたのがサハリだって、ちゃんとわかってたし。あなただから部屋に入るの許可したんだよ」

「……靴音の反響とリズムで、か？」

「ううん、ハニー専用のラブアンテナで♪」

「ハア、という溜め息が室内に響く。」

「ねえ、ハニー」

「……なんだ？」

「こつち向いて？」

「……」

「そう言われながらも、サハリに動く気配はない。」

「早く」

「いや、だが」

「い・い・か・ら！ 早くしないと、サハリが寝てる間に剣隠すよ？」

「再びの溜め息。」

「それからさらに秒針が一周するくらいの間を空けてから、ようやく観念したように、そろそろとサハリは目の前のドアから目を離れた。」

「ゆつくりと振り返った先のリゼの姿に、サハリは思わず絶句した。白い肌、引き締まった筋肉、それでありな

がら女性としての丸みも失っていない身体。

「しかしながら、彼がその裸身から目が離せなくなった理由はそんなもののためではない。」

「サハリの目に晒されている少女の背中には、大小、長短問わずいくつもの醜い傷痕が刻まれていた。右肩から左腰まで一直線に伸びた施術の跡、左肩から少し下がったところにある三つの銃創、下部の肋骨を目掛けたような短剣くらいの横幅の金瘡。遠めに見える大きな傷だけでも、片手指では足りないほどだった。」

「いくら命の危険を伴う任務に従事する者とはいえ、あまりにも多すぎる傷痕。そもそもこれだけの傷を受けた者が、今もまだ生きて、自力で生活できていることだけでも奇跡のようだ。」

「まあ、前も似たような感じかな」

「その言葉に、ようやくサハリの意識が現実に戻された。震える唇で、掠れがちに言葉を紡ぐ。」

「……全く、知らなかった。想像すら……」

「そりやそうだよ。この身体のこと知ってるのなんて、オルナ以外じゃ治療した医者くらいだもん」

「……だから、サイズの合わない制服を？」

「まあそんなとこ。だって、まさに傷物の女って感じでイメージよくないじゃん？ プヘへ」

「自虐的な笑みが少女の口許に浮かぶ。いつもの笑いと同じようで、どこか寒々しい笑顔。」

「……外から見えるのだけでもこれだけの傷だからさ、やっぱいろいろ普通の人と同じようにはいかなんだよねー。小さいところではお酒が飲めなかったり、大きいのだとたまに左腕が動かなくなったり……。ポンコツ女って呼んでくれてもいいよん？」

「……」

サハリからは何も答えられない。笑うことなどできるはずもないし、それを笑い話のように語るリゼに慰めの言葉をかけてやれるほどの強さも傲慢さも持ち合わせていない。できるのはただ口を噤むことだけ。

「……昔は……、といってもそれほど前のことじゃないんだけどさ。まあほどほどに過去の話。この教皇庁に入りたての頃。あたしは望んでここに入ったわけじゃなくて、だからしたいことも特になかったわけ。強いて言えば……さっさと死にたかった。だから誰もやろうとしない危険な任務をどんどん受けて、どんどん自分を傷付けていった。今でもそのときのことを後悔したりはしてないよ。あのときの精神状態なら、当然そういう流れになると思うから」

しかし教皇庁に入った理由は明かされないうまま、リゼの話が続く。

「でもね、あるとき医者に言われて知ったんだ。こんな障害だらけの身体のなかで、唯一普通の女の子と同じように機能する部分があるんだって。ねね、どこだと思

う？」

「……」

なおもサハリの口からは言葉が出てこない。ただじつと少女の話に聞き入っていた。その痛ましい背中を瞳に映しながら。

「……子宮、なんだってさ。変な話だと思わない？ 馬車から落ちただけでも子宮を傷つけて、一生子供に恵まれない人たちだっているっていうのに、これだけ傷を負ったあたしが、まだ丈夫な子を産めるんだって。

その時ね、思ったんだ。あたし自身は一生かけても贖い切れないような罪を背負っているけど、あたしが子供をつくれることには何か意味があるんじゃないかって。あたしの子供には何の罪もなくて、生まれてくることを神様に祝福してもらえないんじゃないかって。

そう考えたらね、もう死ぬわけにはいなくなっちゃった。あたしは誰でもない、あたしの子供のためだけに生きるの。どんなことがあっても、たとえ他の誰かを殺めることになっても、絶対に生き残ってみせる。生きて、そして子供を産みたい。だから、だからね——」

そう言いながら、ベッドの上から薄い布を一枚掴み、軽く全身を覆う。

そして一気にサハリの方を振り返り、落ちないよう片手で布を押さえながら、その胸元へと飛び込んだ。

「だから、さっさと子作りをしてほしいの、ハニー♪ 欲

を言えば今すぐ！ このままこうギュって感じで。それでこうボフって感じでベッドへ——」

シリアス（彼女にしては、だが）な口調から一転、急に明るくなって捲し立てる彼女を、サハリは黙ってその両の腕で抱き寄せた。

（お、おお、おおお！ こ、これは、この流れはあ！ やった、弱みを見せたの正解？ 正解だよね?! うっわ、マジ？ マジで?! いつもは照れて突き放すのに、今日のこれは、これはあ……うわあ、きてるって！ あたしの時代、きたっ!! 苦節一年、ついに、とうとう、待ちに待ったこの時があ！ 今夜あたしは、大人の女性への、というか母親への第一歩を踏み出）

テンション最高潮のリゼは、しかし、気付いてしまう。自分を抱き締めるサハリの手のひらが、小刻みに震えていることに。

「……ハニー？」

一瞬、これからのことへの不安のせいかとも考えたが、緊張から来る震えとはどこか異なることを、彼女は直感的に感じ取った。じつとされるがまま、彼の言葉を待つ。

そうしてしばらくして、彼の口がゆっくりと開いた。手はまだ微かに揺れていた。

「……さつき話した理由で君が自分を求めるのなら、自分には絶対に満たしていなければならぬ条件がある。……そうだろう……？」

「……え？ ねえサハリ、あなた何を言って……」

「……それは、自分が強く在ることだ。少なくとも君と同じくらいに強くなければ……出産を迎える君を護ることなんて、とてもじゃないができるはずがない……」

「そんな……あなたは今でも十分強いじゃない……。剣であたしに遅れをとったことなんて」

「……それは、剣だけの話だろうか？ 君の戦い方は魔術を用いた剣技だ。自分は使えない、魔術を用いた。君本来の力に、自分は遠く及ばない。護らなければならない君に、いつも護られている……」

「サハリ……」

手のひらを少女の肩に載せ、壊れ物を動かすようにゆっくりと身体を離れた。リゼの方にも、再びサハリに向かつていく勢いは失われていた。

「……必ず、自分は強くなる。大切な君を護れるように。隣を歩けるように。だから、今は」

そう言って、顔を合わせないようにしてサハリは身を翻した。躊躇うことなく部屋の扉を開け、外へと向かっていく。見送る少女は無言。

そうして彼の出て行ったドアが閉まるのとほぼ同時に、リゼはベッドに頭から倒れこんだ。

「……うん、いいところまでいったのに……。やっぱ急ぎすぎちゃったかにゃー」

気だるげにベッドの上で仰向けになりながら、ゆっくり

りと右手を上を持ち上げる。そうして、目の前の何かを掴み取るうとするかのように、何度か手のひらの開閉を繰り返す。ひとしきりその行為を繰り返すと、

「……はあ、寝よ」

久しぶりのベッドの感触を味わいながら、徐々に身体
の力を抜いていったのだった。

「封具は自分が持つ」

「いや、でも」

「竜種の力はその辺の獣とは格が違う。二人がかりでも数刻と保たないだろう。だからこそ二人のうちより強いほうになるべく長く相手を惹きつけ、その隙にもう片方が封具を使用する。クヴァル様から授かった策でもあるし、これがベストな作戦なのは君にもわかっているんだろう？」

「それはそうだけど……でも」

どこかやりきれない表情をしている相棒に向かって、
対面に腰掛けるサハリが手を伸ばす。

「大丈夫。自分は力を求めて焦ってはいない。もちろん無力さを悔いる気持ちはあるが、それはそれ、これはこれだ。任務には最も効率的な方法で挑む。それが結果的には最小のリスクでの行動に繋がる」

「むう……」

頭を撫でられながら、窓の外へとそっぽを向くりぜ。そんな様子を見つめながら、サハリの目も自然と穏やかなものになる。

ガタゴトと、馬車の車輪の音だけが静かに響いている。

彼ら二人は、教皇庁への帰還もそこそこに、すぐにまた次の任務のために聖都を離れた。

今回の任務は、不確定情報ながら地方からの目撃の報が寄せられた竜種、つまり魔性のドラゴンの調査、及び発見された場合の討伐。しかし竜種とは稀少価値が極めて高く、そしてまた人智を超えた強大な存在として知られている。普通に戦っては一中隊分の兵を以ってしても敵しい相手だが、サハリの手にある琥珀色の封具は、女性の手でも簡単に覆い隠せるほど小さな球形をしているが、その威力は教皇庁に蔵されている貴重な秘宝群のなかでも特に高い位置付けがなされている逸品である。曰く球の中は時の流れが固定化されているのだとか。

「あ！ すみませくん、ちよつと馬車止めてくださあゝい！」

外に何か気になるものでもあったのか、リゼが突然大声を上げた。その言葉に従い、二人の乗る馬車は徐々に速度を落としていった。

「何かあったのか？」

「いいからいいから。ほら、サハリも来なつて」

そう言いながらあつという間に少女は馬車の中から姿

を消していた。

「ついつい洩れそうになる溜め息を堪えながら、サハリもゆつくりと馬車を降りていった。」

「ほら見て見て、サハリ！ 水平線だよ水平線！」

「遠くの方を指しながら、浮かれた声でリゼが叫ぶ。」

「……いや、地平線、だろ。海じゃないんだ」

「サハリの小さなぼやきに、ぴたりと動きを止めた少女の顔を俯かせながら、ずんずんとサハリの元へと歩いてくる。」

「？」

「彼女の行動に首を傾げる暇もあればこそ。」

「うっ」

「あつという間にリゼの拳がサハリの脇腹にめり込んでいた。」

「いいの！ 水平線だろうが地平線だろうが、どっちでも！ まったく、せつかく人がいい気分景色を眺めたつていうのに」

「ごほ、ごほ……。……いや、いくら、なんでも……。今のは、ちよつと強すぎ……。……」

「ふん、知らんわい」

「そういつてまたリゼは視線を地平線へと戻した。サハリは乱れた息を整えるのに精一杯な様子。またしばらくして。」

「……ね、サハリ」

「……ごほ、……。ごほ、な、なんだ？」

「あなたはこの欠けた空を見てなにを思う？」

「ごほ、……。ん……。？」

「聞き返すが、リゼは答えない。一度は崩壊に向けて進み、現在も危ういバランスの上に辛うじて成立している世界の、その一部をただ瞳に移すだけ。」

「世界が消えなくて、よかったと思ってる？」

「……」

「あたしはね、よかったと思ってる。前のあたしなら絶対こうは思わなかったと思うけど……。でも、今あたしは、確かにこの世界が生きていて嬉しいの」

「……そうか」

「そうか、つて……。他人事ね。あたしがそう思えるようになったのは他でもない、あなたとこうして出会えたからなんだよ？」

「……」

「あれ、あれれえ？ あの、今の一応殺し文句のつもりだったんですけどー？ ねえ、キュンって来なかった？ ねえ、ねえ？ ねえつてば」

「しばらく間を置いて、ぽつりぽつりと、しかしまっすぐな意志を秘めた言葉が、青年の口から紡がれる。」

「……」

「一陣の風が吹き、辺りに土煙が舞い。」

空が轟と鳴り。雲が引っ張られるようにして動き。そんななかであつても、彼の言葉は確かに彼女の耳朶に残った。

「プへへえ。ありがと、ハニー♪」

「あーもうー！ あんなどころまで行つて無駄足だったなんてー！」

「わかった、わかったからもう騒がないでくれ。いい加減気が減入りそうになる」

「何よー！ 何でサハリはそんなに冷静なのさっ」

「竜種がそうそういるもんじゃないってのは承知の上だろう。別に今回だけが特別なわけじゃない」

「でも往復にどれだけ時間かかったと思つてるの?! 本部にいた時間よりも移動時間の方が長いってどういうことよ?」

「どういふことだと訊かれてもな……」

「これはオルナに一言文句言つてやらなきや。それでたあつぷり有休をせしめてやるのよ。それからそれから」

しかしそう言う間に、眉根を寄せていたリゼの表情がどんどんだらしないものになつていく。

「それからあ、もちろんハニーも一緒に休みをとつてえ、二人して引き籠もりに……♪ ……ああ、でもずっと教皇庁の宿舎でつても味気ないよね……じゃあナナル湖

の畔^{ほとり}とかどうだろ? あなたは湖で生まれたのよ、なんて? なあんちやつて?! キャーツ! どうしよう?!」

「……自分の方こそどうしようだよ……」

やんやんと首を振るリゼと、同じくやれやれと首を振るサハリ。傍から見れば明らかに異様な組み合わせだったが、そんなことは当人たちには関係のない話だった。

そこには幸せな空気が漂っている。それだけが全てで、おそらくそれだけがあれば十分だった。

しかしそんな時間も唐突に終わりを告げる。

辺りにピー、という笛音が鳴り響く。

「! サハリ!」

「……ああ、もう囲まれ始めてる。急いで迎撃体制を」

「うん。御者さん、あなたは急いでこの場から距離をとつて! 2時の方向からなら多分いけると思う。頃合いを見計らつて戻つてきてくれればいいし、最悪ここからなら歩いて聖都に辿り着けるわ!」

そう叫んでから、躊躇することなく移動中の馬車から飛び降りていく。それにサハリも間髪入れずに付いていった。

戦いの匂いがした。

急加速をして離れていく馬車を横目に、リゼとサハリ

は警戒を強めていた。

「……気付いている、サハリ？」

背中合わせになりながら、リゼは背後のパートナーに声をかけた。

「……ああ。囲まれていると思ったが、どうやら魔術の類だったようだ。気配が分散していて位置が特定できない」

辺りは大小さまざまな岩が転がる一面の荒野。地の利を活かせば、潜む場所には不自由しない。

「ただの盗賊団……じゃないよね。手口があまりにも組織的で狡猾すぎる」

「……そうだな」

「ふふ、大丈夫よ、サハリ。あたしは絶対に生き残るし、あなたも殺させやしない。なんてったって将来の旦那様だもの♪」

「……余裕だな」

「まあ、ね。……**光輝**」

半身まで抜きかけているリゼの剣が、その短い呪文を合図に淡い光を放つ。

それを横目で確認しながら、知らずサハリは唇を軽く噛んでいた。

わずかな静寂が辺りに満ちる。

「来る！」

周囲の殺気が膨れ上がったのを察して、リゼが声を上

げる。その声に合わせて、全身に力を込めるサハリ。

しかし、その第一手から敵は二人の意表を突いてきた。

全方位から矢が放たれる！

敵が全方位にいると錯覚させた魔術。だがその術の真の狙いは、全方位に配置されていた矢を悟らせないためだった。

矢は弓を介して放たれるもの。だが弓からのみ放たれるにあらず。極端に言えば手で投げても矢は放てるのだから、さまざまな媒体が動力となり得てしかるべき。

無論、魔術であっても。

(しまっ——)

予期せぬ先手に、サハリの身体が一瞬硬直する。致命的なまでの隙。そして、毎度のことのように勝手に動くうとする身体にブレーキをかけている間に、矢はもう目の前に迫っていた。

ドン、と。

強烈な衝撃が脇腹を打つ。両足が地を離れる。

矢に撃たれて、ではない。矢なら鈍器で殴られたような衝撃はしない。

もの凄い速さで遠ざかる景色の中に、リゼの姿が映る。

剣を立てて振り抜く、その姿が。

(何があっても、誰を殺しても生き残ると言っただろう!! それがなぜ、自分を庇ってそこにいる、プラディーッシュユっつ!)

リゼは剣の峰でサハリを吹き飛ばしていた。周りには依然、天を覆わんばかりの大量の矢。剣を引き戻してできるかぎり向かってくる矢を打ち払うが。

一本、二本、三本――。

打ち漏らした矢が、次々とリゼの身体に突き刺さる。

勢い良くサハリが地面に叩きつけられる。ゴツゴツとした岩地を転がりながら、彼は必死でリゼの姿を探す。

そうして彼が体勢を立て直し終わった頃には、すでにリゼの身体には十以上の矢が突き立っていた。

「ブラディッシュユ！」

サハリの声が辺りに木霊する。

「……だ、大丈夫……」

搾り出すような声で答えが返ってきた。

「……意外、と、平気、みたい」

つい安堵の息を漏らすサハリ。

しかしその安寧も、別の声によつてすぐに打ち破られた。

「それはそうだろう。私たちは諸君らを殺すためではなく、手駒とするために活動しているのだからね」

そこかしこの岩陰から似たような黒いコートを纏った人影たちが湧き出てきた。皆同様に道化のような仮面をしており、素顔を窺い知ることはできない。どう楽観的に見ても、友好的な関係を結ぼうとしているのではないの

は明らかだった。

その中で唯一赤いコートを着ているリーダー格らしき人物が言葉が続ける。言葉から男性だということがわかるくらいで、他の情報は掴みようがない。

「その制服、見たことはないがどうせ教皇庁のものだろう？ あそこの兵士は鍛えられているから、大して手を加えずとも戦力となつて便利なのだよ」

「……貴様ら、一体何者だ？」

辺りを警戒しつつサハリが尋ねる。すぐにでもリゼの元へ駆け寄りたかったが、感情をギリギリのところまで性が押し留める。今突っ込んででも不利になるだけだと自分に言い聞かせ続けた。

「何者でもないさ。今はまだ、ね。ただ優秀な人材を集めているだけのしがたない集団、といったところか」

「自分らが大人しく貴様らの言いなりになるとしても？」
「勘違いしないでいただきたいな。我々が欲しいのは諸君らではなく、諸君らの肉体だけなのだよ。ただ、殺してしまふと身体も使えなくなってしまう。それだけのことだ。身体さえ生きていれば本人の意思などすぐに消せるのだよ。そう、ちょうど彼らのようにね」

そういつて赤いコートの男はあたりの黒いコートの人影たちを見渡した。黒いコートの人影たちは、皆不気味なほどに挙動が似通っていた。

「……なるほど……つまり……」

そう言いながらサハリは腰の剣を引き抜き、人全身に力を込めていく。

「貴様さえどうにかできれば、この状況を脱せる！」

弾かれたように、一気に赤コートへと肉薄する。

赤コートの方は、特にその様子に気を留めるでもなく呟いた。

「ふむ、頭の回転が速いのは結構だがね」

目標まであと数歩というところで、サハリの足が止められた。目前に剣を構えた黒コートが二人現れたからである。その移動速度は、明らかに常人のそれを逸脱していた。

「彼らは強いよ。少なくとも君よりは」

その言葉に偽りはなかった。

目の前に割って入った二人を相手にしたサハリは、そう痛感せざるを得なかった。

数回剣を打ち合わせてみただけでわかる。おそらく自分の実力では一対一で勝つのがやっと。そんな相手が今相手にしている二人以外にあと十人近く。まさに絶体絶命の状況だった。

(何故、あそこで膝をついているのが自分じゃなくてブラディッシュなんだ。彼女が万全なら、もしかしたら)

《そうしてまた彼女に頼り、自分は助けられる側》

(力が、力さえあれば……)

《力だけで護れなかった男が、力さえも失って、一体何を護れる気でいたのか》

己の道を塞ぐ人影がさらに倍に増える。

もはや自身の身を守るだけで精一杯。一步も前になど進めない。

「まずはこの少女からか。おい、押さえろ」

「う、くう……」

リゼが三人がかりで押さえつけられ、地面に押し付けられる。

「離せ！ ブラディッシュから、離れろーっ!!」

《声だけじゃ、何も護れない。自由になるのが声だけじゃ、何の意味もない》

(……失う……大切なものを……目の前で……)

《また失う。また。何度も。失う失う失う。何度でも》

(護ると誓ったものを……失う)

《《今度こそ、救う！》》

黒いコートが、千切れて舞った。

最初は一つ、次は三つ。

黒いコートが、千切れて舞った。

操っている端末のうちの四つから、ぽつんと反応が途絶えた。

不思議に思った赤コートの男は小首を傾げながら、少女から目を離して反応の消えた辺りへと視線を移した。

黒髪の青年が一人いた。

幅広の剣を片手にぶら下げた青年が、一人だけいた。

それだけだった。

他の黒コートたちはどこへ行った？

そう疑問に思いながらも、少女を拘束する以外で、他で待機させていた自身の駒たる黒コートの、全てを集めて黒髪の青年へと差し向けた。

黒いコートが、千切れて舞った。

赤いコートの男の前で。

黒いコートが、千切れて舞った。

「な、なんだ……」

赤コートが知らず知らずのうちに後ずさりをし、無様に尻餅をついた。

だがそれにも関わらず、赤コートは視線を動かそうとはしなかった。

「……あれは、一体、何だ？」

その声に答える言葉はない。

ただ、黒髪の青年がこちらのほうに向かってくるだけ。

「く、来るな……」

黒髪の青年は止まらない。

「来るなど言っている……」

黒髪の青年は止まらない。

「来るなど言つとろう、阿呆があああ！」

目の前に迫った黒髪の青年に向け、少女の拘束をさせていた残りの黒コートたちを放った。

だが結果は変わらない。

剣を構えた黒コートを、その剣ごと叩き斬って一刀の下に捻じ伏せる。ただそれだけのこと。

舞台にはすでに三人だけ。赤いコートと、青年と、少女だけ。

「……何だ、何なんだ、キサマハアアアアアアアアアア」

その言葉を最後に、赤いコートの男の首が飛んだ。

あまりにも呆気なく、まるで雑草が引っこ抜かれるように、他愛無く人が一人死んだ。

舞台にはもう二人だけしかない。

「……サハリ……？」

そう最初に声をかけたのは、少女、リゼの方だった。

「……」

しかしそれに答える青年、サハリの声はない。

「……サハリ、だよ、ね……？」

姿形はどうみてもサハリ・ハーノヴィーと同一。しかし、言葉では言い表しえない決定的な何かが、リゼの心に強く引っかかっている。

「……なぜ、俺は生きている……？」

ぼつりと、そうサハリが呟いた。

「……え？」

「……なぜ、俺は……」

今まで虚空を彷徨っていたその目が、不意にリゼの方を向く。その目はサハリのものとは思えないくらい黒く澄んだ、というよりも無機質すぎる黒さだった。

「……あいつのいない世界で、生きたいと願っている……？」

「……な、何を言つて……」

とにかく立ち上がろうとするリゼ。しかし、足腰が立たない。それは矢に仕込まれたものの影響だけではない。

「……そうか、結局、あの女の手のひらで踊っていただけだったのか……。そしてそこまで理解できているのに、感情は思い通りにならない」

「ね、ねえ、さつきから一体何を」

「お前は、リゼ・プラデイツシュ、だったか？」

その目が全てを見透かすようにリゼの目を覗き込む。

リゼは目を離したい衝動に駆られたが、なぜか蠟で固められたように、目線がぴくりとも他の場所へと動いてくれなかった。

「……お前さえいなければ、楽になれただろうが……」

「……」

そこでようやく彼女は気付いた。目の前の男は、今誰とも会話していないのだということに。彼は誰かに答えをもらうために言葉を発しているわけではないのだと。

リゼの見上げる前で、青年は空へと顔を上げる。

「俺はこの世界で生きていたくない。自分はこの世界に生きていたい。」

「なら、一体どうすればいい？」

所々が欠けた青空を見上げながら、ゆったりとした動作で男は制服のポケットへと手を突っ込んだ。

「ん？」

何かに気付いたように、そつとポケットから右手を引き抜く。

その手には琥珀色の球体が握られていた。

「……はは。まさかあの女もここまで予期してたわけじゃないだろうが、こいつは都合がいいな。さて、永久に死ぬか、それとも……」

乾いた笑いを漏らしながら、男はいきなり手に持った球体でドンと自分の胸を突いた。

すると、手足の端からもの凄く速度で体の部位が球体

へと吸い取られていく。

「……ちよ、ちよっと、待ってよ、」

ことここに至って、ようやくリゼにも状況が飲み込めてきた。

理由などは未だよくわからないが、とにかく目の前の男が、自身に向けて対ドラゴン用の封具を使った。それだけは確かかなようだった。

「ねえ、ねえつたら！」

しかしいくら呼びかけても答えは返ってこない。

見る間に、胸部と顔以外は皆琥珀色の球体の中に吸い込まれてしまっていた。

何もできない少女。

だが最後に。

そこだけになった青年の顔が、リゼの慣れ親しんだ表情を形作った。先程までの蛻の殻のような、感情の色を灯さない無機質な表情ではなく、生の人間の相貌。

「……ありがとう、幸せだった」

「……え？」

慌ててリゼが問い返す。しかし瞬く間に最後の顔すらも球体へと消えていった。

そうして最後には、その場に少女と小さな琥珀色の珠しか残っていなかった。

「……よかったですか？」

「リゼ・プラディッシュに旅の許可を出した件ですか？
おそらく大丈夫でしょう。ある程度支柱建設も順調に完了していますし、特に急を要する作業もこれといって」

「……いえ、その件ではなく」

「？」

「……。……サハリ・ハノヴィー、いえ、エンデュミ
オ・ハサルウェイの傍で彼を支え、また彼からも支えられ、記憶が甦った際に彼の生きるための楔となるべき人間が彼女でよかったですか、ということですか」

「……今更、ですね……。では他に適任がいたと？」

「……」

「ごめんなさい、卑怯な逃げ方でした……。わかっています、貴方の言いたいことは。なぜ私自身が彼の傍に寄り添わなかったのか、ということですね？」

「……はい」

「そうですね……。彼とは長い間一緒にいましたから……。とはいっても随分子供時分の話ですが。彼の好みはなんとなく把握しているつもりです。それに自分が合致しないことも」

「……しかし」

「……ええ。結局、そんなものはただの体のいい方便に過ぎません。」

「……本当は、怖かったのです。記憶が戻ったときに、あつさり彼が死んでしまうのではないかと。楔たり得なかつたとき、果たして私が私のままでいられたかどうか」

「……」

「……完璧な記憶の捏造など不可能です。記憶というのはいくつもの層に分かれ、しかもそれがその時々で分裂したり連結したりを繰り返す。だからこそ記憶が戻るのは必然であり、そしてそのとき、つまり自身の感情全てを秤にかける審判のときと、常に背中合わせでいる不安に耐えられる自信がなかつた。自分の力の不完全さを理解しているからこそ」

「……」

「そしてなにより、自分の存在を否定されかけてまで、封じられた彼を救い出そうと考えられたか、私には自信がないのです。リゼ・プラディッシュは強いひとです。おそらく私では持ち得ないほど、強い心を持っている。だからこそ、彼を封具から解き放つ手段を求めて、ほんの僅かな希望だけで旅に立てる」

「……それであなた様が後悔しないと言うのであれば、私から申すことはもうありません」

「……後悔、ですか……。それなら遙か以前からずっと」

してきますよ。あのとき彼の手を離さなければ、と。今更何を言っても遅すぎる、どうしようもないほど昔の話ですが……」



「おじさーん、ちよつといいー？」

「お何だい、お嬢ちゃん？ んん、お嬢ちゃん、この辺りじゃ見ない顔だねえ」

「うん、ちよつとこの辺りに用事があったさー。いやまあここ以外にもいろいろ用事があるところはあるんだけど……。つてああ、脱線しちゃった。」

あのさ、この辺りにルール・ノラヒムっていう魔法使いさんっていない？」

「ノラヒム？ うーん、ちよつとわからないなあ。ただ、この先の雪山に数百年生きてる魔女がいるっていう伝説は残ってるけど……」

「おお、じゃその人かもー。ありがと、おじさん。行ってみるねー」

「ちよちよ、ちよつと待ちなよ、お嬢ちゃん！ あの雪山は大吹雪はもとより、何より凶暴な獣がわんさか出てくるって話だ！ お嬢ちゃん一人でなんて無茶だよ！」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。こう見えてもあたし結構強いんだよ？」

「いや、でも……」

「ちよちよいつと見に行つて、すぐに返ってくるから大丈夫だってば。魔法使いさんにはちよつと訊きたいことがあるだけだし」

「……まあそこまで言うなら止めやせんが……あくまで伝説で、無駄足になるかもしれないよ？ なんだつてそんな大変なことを……」

「うーん、それはねー……」

そう言いながら少女は、首から下げた琥珀色の球体に、サイズの合わない服の上から優しく触れた。

「こーんなかわいい美少女を一人置いて遠くへ言っちゃったどっかのバカに、一言言つてやらなきや気が済まなかつて。プへへ」

それは、遠い彼方の日、もしかしたら永遠に訪れないかもしれない、そんな果てしない『いつか』のために誓う言葉。

彼女はとびっきりの笑顔で空に向かって叫んだ。

『ぐだぐだ言つてないで、あたしのためだけに生きなさい！』つてね！』

「了」